

ゴールドブレンドコンサート 倉敷

国民文化祭協賛事業
山陽放送創立35周年記念

GOLD
BLEND.
Concert
1987

音楽監督・指揮：石丸 寛
ゲスト：塩川悠子（ヴァイオリン）
オーケストラ：RSKゴールドブレンドオーケストラ

“豊饒な音楽の実りを”

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

〔第1部〕 1. 「エグモント」への音楽 序曲 作品84

2. ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品61

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・トロポ（快速に、しかし速すぎないように）
第2楽章 ラルゲット（ゆるやかに＝ラルゴよりやややく）
第3楽章 ロンド：アレグロ（快速に）

〔第2部〕 交響曲 第8番 へ長調 作品93

第1楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ・エ・コン・プリオ（生き生きと快速に、元気よく）
第2楽章 アレグレット・スケルツァンド（諧謔的にやや快速で）
第3楽章 テンポ・ディ・メヌエット（メヌエットのテンポで）
第4楽章 アレグロ・ヴィヴァーチェ（生き生きと快速に）

企画原案：石丸 寛
企画構成：森 千二
制作：RSK山陽放送
制作協力：(株)1002

主催：RSK山陽放送
提供：ネスル株式会社
後援：山陽新聞社
岡山県教育委員会

1987年9月13日(日) 昼の部 2:00pm 夜の部 6:30pm

会場：倉敷市民会館

〔放送日〕 RSK山陽放送：テレビ 9月19日(土) 2:00pm～2:54pm
ラジオ 9月14日(月) 7:00pm～8:00pm



塩川悠子(しおかわ・ゆうこ, ヴァイオリン)

東京生まれ、ヴァイオリンを佐藤吉五郎、多久興、ジャンヌ・イスナールの各氏に師事。11歳で南米ペルーに渡り、リマ交響楽団と協演してデビューを飾る。1961年ドイツ政府給費生として渡独、ミュンヘン音楽大学に留学。ウィルヘルム・シュトロス教授に師事。ラファエル・クーベリックに認められ、1967年より秘蔵の名器ストラディバリウス Emperor を貸与され、ロンドンにおいてクーベリック指揮ニューフィルハーモニアと協演、絶賛を博す。1968年よりシャンドール・ヴェーク教授に師事。日本では1969年2月NHK交響楽団との協演および3月のリサイタルでデビュー、絶賛された。

そのごベルリン・フィルハーモニーの定期で一躍ヨーロッパ楽壇の注目を集めたほか、主要なオーケストラと次々と協演。とくにカラヤン指揮のベルリン・フィルとの協演やニューヨーク・フィルの定期への出演は話題を集めた。

最近ではアンドラーシュ・シフラと組んで世界各地でリサイタルを開いているほか、室内楽活動も積極的に行い、日本を代表するヴァイオリニストとしてその活躍の場はきわめて広い。またディスクの録音も数多い。

ベートーヴェン(Ludwig van Beethoven 1770~1827)がのこした偉大な業績について、初期、中期、後期という三つの時期に区分するという考え方が一般的になっています。初期は、ベートーヴェンが生まれ故郷のボンを離れてウィーンに移った20歳前半から後半にかけて、どちらかといえば、モーツァルトやハイドンといった敬愛する先輩から多くを学びとっていた時代ですが、そのあと、そうした胎動の時代を受けて、30歳以後続々と名作を産み出しはじめた黄金の壮年期が10年間つづきます。そして、後期は有名な「第九」をはじめ、深い精神性を示した晩年の作風に入っていくわけです。

このうち中期のベートーヴェンは、20代後半から少しずつ悪くなった耳の病気が進行し、ついには1802年に至って、有名な「ハイリゲンシュタットの遺書」まで書くこととなります。まさに、絶望との限りなく闘いの時代だったわけですが、自殺を思いとどまった彼は、筆談に頼らざるを得なくなってもなお旺盛な創作欲を失わなかったわけですから、その超人的な精神力にはほんとに驚かされています。

きょう演奏される曲は、すべてこの「豊饒」の時期に書かれました。

***「エグモント」序曲**

1809年から翌年にかけての作曲。ベートーヴェンが敬愛し深い交際をつづけていた文豪ゲーテが、実在したエグモントというオランダの軍人を主人公にして悲劇を書き、その劇音楽としてベートーヴェンが作曲を依頼されたものです。しかしこんにちでは「序曲」だけを演奏することの方が多くなっています。

***ヴァイオリン協奏曲**

ベートーヴェンが作曲した唯一のヴァイオリン協奏曲(未完のものが1曲あります)であるこの曲は「エグモント」の音楽が作曲され

る3年前、1806年に書かれました。初演は成功したのですが、そのごしばらくの間かえりみられず、40年近くもたってから、当時の有名なヴァイオリニスト、ヨアヒムが取りあげたことでこの曲の真価が認められ、いまでは古今のヴァイオリン協奏曲の王者とさえ称えられています。

***交響曲 第8番**

ベートーヴェンはその旺盛な創作意欲のおもむくままに、それこそあらゆる分野の音楽をてがけましたが、しかし彼の音楽の真髄は、彼の9つの交響曲にあるといわれます。形式の上でこそ新しい改革はあまりみられません。内容の面では先輩のハイドンやモーツァルトにくらべて比較にならないほどの深みを加え、ロマン主義音楽——とくに交響曲の基準ともいえるものをつくりだしたといえましょう。

この9つの交響曲のうち、第5番と第6番は1807年から1808年の完成、第7番と第8番は1812年の完成と、それぞれ同じころ平行してつくられており、双生児的作品として対比されていますが、いずれにしても、音楽家として致命的な耳の病気に苦しんでいたこの時期に、彼の生涯のなかでもっとも充実した創作活動が展開され、これほどの名曲を続々と生み出したベートーヴェンの強い意志力は、まさに超人的としかいいようがありません。

第8番は1812年10月に完成、どちらかといえば古典的な形式をとっているために、表題のついた曲やこの後の第9にはさまれてかげがうすいように思われ勝ちですが、苦悩の末にたどりついた深い精神性に根ざしたベートーヴェン独特のロマンティシズムにあふれた名曲であることは、この曲も例外ではありません。

RSKゴールドブレンドオーケストラ

コンサートマスター：佐藤真理子

インスペクター：坂口充倫

第1バイオリン

佐藤真理子
田中佑児
丸山博樹
家守智子
芳沢真一
吉田精一
三谷道広
田中栄一
藤米田健生
園田哲郎
中桐佐知子
高口嘉一
千田真澄
玉井千鶴子
抜井寛
十川真弓

第2バイオリン

木村啓子
赤沢和美
金城由紀恵
岡崎良弘
河村真知子
真田奈美

田熊真理子
田中佑児
丸山博樹
家守智子
芳沢真一
吉田精一
三谷道広
田中栄一
藤米田健生
ヴィオラ
黒住彰夫
内田けい子
奥山千鶴子
勝部喜代志
武本克巳
友野良一
中野隆重
新見由枝
西真佐枝
八木原周平
坂文雄
坂昭男
李善銘

チェロ
西田毅雄
池田裕子
井上暢
井上良子
黒田正典
田中光子
田辺幹夫
松江雄二
光延勢吾
浮田和也
河口友子

コントラバス

本屋敷勝信
亀高由子
曾我部仁和
難波由宏
松本高広
安田友子
吉田弘一
岡田利江
松本武全

フルート
坂口充倫
片山知子
坂井昌子
オーボエ
角田容子
赤松由紀子
秋山慶子
安田元子

クラリネット

川名光治
川崎史子
高杉睦子
ファゴット
稲田裕彦
木村峰子
中川裕
西倫世

ホルン
吉市幹雄
板谷信昭
西崎大修
文谷功

トランペット

石原憲
岡本卓也

ティンパニー

平松泰一

オーケストラ協力出演

倉敷管弦楽団/高松交響楽団/香川室内合奏団

ゴールドブレンドコンサートニュース

いよいよ15年目を迎えたゴールドブレンドコンサート
今年も全国6都市で開催されますが、その4回目が倉敷です。
このコンサートが岡山県で催されるのは7回目、
倉敷市では、4年ぶり4回目になります。

広がりゆく交流の輪

今回のゴールドブレンドコンサートは、前回のように倉敷管弦楽団が中心になり、それに香川県のプレイヤーや一般応募の方々も加わって編成されました。

ご承知のように、待望の瀬戸大橋は来年の開通を目指して急ピッチで作業が進められています。4月10日の開通を前にして、来年3月20日からはやばやと博覧会も開かれると聞いていますが、こちらはそれよりもっと早く、音楽の世界で、岡山県と香川県を結ぼうというわけです。

今回のコンサートには、合同演奏というところまではいきませんでした。呼びかけに応じて四国からたくさんのプレイヤーが応援に駆けつけて下さいました。瀬戸大橋が開通して人や物の流通がスムーズになるだけでなく、こうして人の心や技術の交流が盛んになるのは、とても素敵なことですね。

8月2日に、東京のサントリーホールで開かれたゴールドブレンドコンサートスペシャルでも、全国から多くのプレイヤーが集まり、この倉敷や高松、徳島からもたくさんの方々が参加して下さい、大いに交流が深められました。全国各地でそれぞれの活動をつづけている人たちが初めて顔を合わせた演奏でありながら、満員の聴衆を圧倒的な感動の渦に巻き込んでしまうほど素晴らしい演奏ができたのも、同じ音楽を志すもの同士、心の通い合いがステージをひとつにしたからにちがいない

ません。これからも広く交流の輪を広げていって下さい。

倉敷管弦楽団のご紹介

今回中心になった倉敷管弦楽団は、美しい音色、よいアンサンブル、質の高い音楽をモットーとして昭和49年に設立、倉敷という文化都市にふさわしい若さと熱気をもって、この13年間旺盛な演奏活動をつづけてこられました。

いまや岡山県を代表するオーケストラとして、定期演奏会だけでなく、郷土に根ざした曲の初演(團伊玖磨作曲：弦楽のための高梁川)やオペラ公演への参加など幅広い演奏活動を続けていらっしゃいますが、そうした活動に対して昭和57年に岡山県文化功労賞を、昭和60年には倉敷文化連盟賞を受賞、将来を大きく期待されています。

ごちそうさまは、ゴールドブレンド

いい音楽に接した後とおなじように、食後のコーヒーはいちだんとおいしく感じられます。ところでいま、おいしい発見として注目されているのが、和食の後のゴールドブレンド。日本の風土が磨きそだてた繊細な味わいのコーヒーだけに、ハーモニーは格別です。おまけに、なんとなくオシャレだし、食後のひとときがいちだんと豊かに感じられます。さっそく今夜からでもお試しください。

GOLD
BLEND
Concert
1987

ゴールドブレンド
コンサート

音楽を通して、弾く人と聴く人の感動がひとつに溶けあう、ふれあいのひととき。この街のアマチュア音楽家が、あなたの

ために、この街のために奏でる手づくりの音楽会。それがゴールドブレンドコンサートです。厳しい練習を経て、いまオー

ケストラは弾く喜びに満ちています。あなたも音楽を肌で感じ、聴く喜びや楽しさを実感してください。コンサートは

これからも、若き音楽家たちの情熱、若々しい旋律をいかしながら、さらに、熱い音楽を日本中にお届けしてまいります。

熱 い 音。





熱

美しい音楽で日本中をつつみたい
 ——石丸寛とスタッフ
 オーケストラで、ステージで、音楽を弾きたい
 ——アマチュア音楽家
 生のクラシック音楽を楽しみたい
 ——音楽ファン
 地元の音楽文化を向上・発展させたい
 ——教育委員会、放送局、新聞社

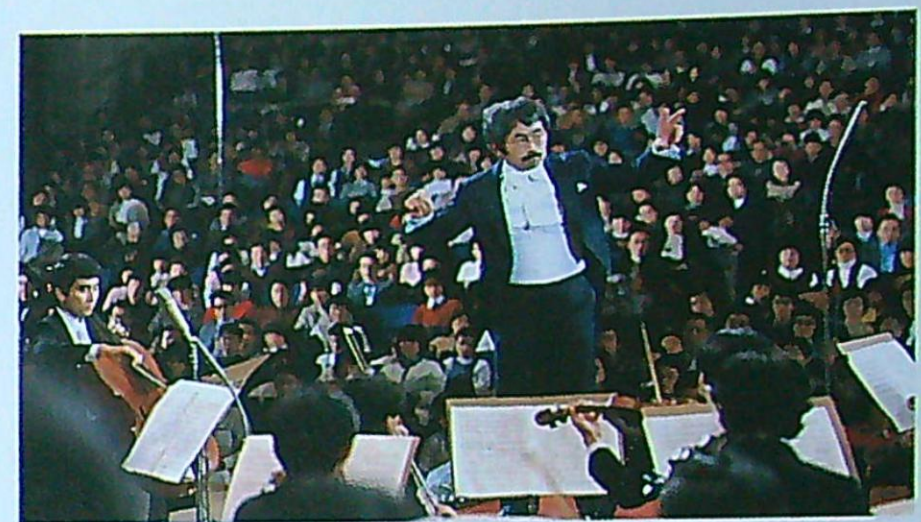
いい

それぞれの夢、それぞれの願いが
 “音楽を愛する心”で
 結ばれて生まれたゴールドブレンドコンサート。
 1973年にスタート以来、
 これまでに全国126都市で開催され、
 出演者・観客を合わせると
 約40万人におよぶ人々と、
 音楽の感動をわかちあってきました。
 ゴールドブレンドコンサートを機に、
 各地に定着したオーケストラや、
 格段の進歩をとげたオーケストラがあります。
 ステージに感動し、オーケストラに入団した人、
 熱烈なクラシックファンになった人もいます。
 あたたかなエピソードを奏でながら、
 日本中に音楽の輪をひろげ続ける
 ゴールドブレンドコンサート。
 きょうは、あなたの街へ……。

輪。

1987 ゴールドブレンドコンサート開催スケジュール(予定)

3/28(土) 高松市
 4/12(日) 新潟市
 6/27(土) 大分市
 9/13(日) 倉敷市
 10/25(日) 甲府市
 12/19(土) 静岡市



年	都市数	観客数	出演者数
'73	10都市	23,772人	2,955人
'74	14都市	37,304人	3,400人
'75	11都市	30,442人	2,641人
'76	9都市	29,984人	2,028人
'77	10都市	30,881人	1,689人
'78	10都市	32,171人	2,056人
'79	11都市	34,052人	2,284人
'80	9都市	31,423人	2,950人
'81	9都市	28,214人	1,224人
'82	7都市	21,127人	1,156人
'83	8都市	23,919人	1,287人
'84	8都市	21,705人	856人
'85	5都市	14,630人	996人
'86	5都市	14,600人	556人

熱

しい

汗。

ゴールドブレンドコンサートに出演するオーケストラ、コーラスはこの街のアマチュア音楽家のみなさんです。石丸寛音楽監督・指揮のもと、さまざまな職業にある人たちが、きょう、このステージのために数カ月前から集まり、厳しい練習を重ねてきました。楽器の演奏技術も「ヴァイオリンを手にして、まだ3ヵ月。楽譜も



やっと読めるくらい」という中学生がいれば、「学生時代から弾いてき



て、現在も地元のオーケストラで活動している」という公務員や、「むかし弾いていたんですが、私も参加できるでしょうか」とたずねてきた50代の女性など、レベルも年齢もまちま

ちの音楽愛好家が集まってはじまりました。上手な人は初心者をはげまし、初心者も一所懸命それに応えたりと練習を重ねるたびにメンバーの結びつきは深まり、オーケストラとしての呼吸も合ってきます。また、石丸

寛やトレーナーの厳しくても、あたたかい指導によって、バラバラだった音が、徐々にまとまりをもった旋律を生みだし、やがてひとつの音楽としてできあがりはじめます。



最後のリハーサルともなれば、石丸寛もオーケストラも汗だくで総仕上げに。会場の空気は、ピンと張りつめたようで、石丸寛の細かい注意を全員がしっかりと聞き真剣な目を向け、本番への意気込みと緊張がうかがわれます。

そしていよいよこのステージで、熱い汗の成果が披露されるのです。ひとりひとりの熱い音がうつくしく重なり、素晴らしい音楽が奏でられることでしょう。

あなたの街のアーティストたちに、どうぞあたたかい拍手をお送りください。



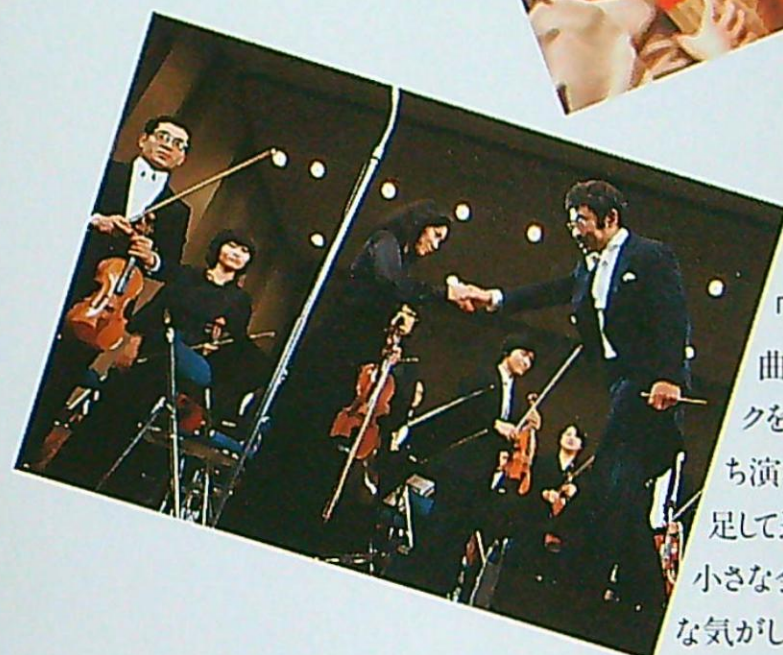
熱

い

時。



●弾く喜びを実感しました。こんなことは初めてだった。なんと「新世界より」の各楽章ですごい拍手があったのです。ふつう交響曲は全部の楽章が終わるまで拍手してはいけませんが、あまりクラシックを聴いたことのない人が多かったのでしょう。でも、この拍手は、私たち演奏家にとっては本当にうれしいこと。きっと私たちの音楽に心から満足して送ってくれたものだと思うからです。石丸先生もいやな顔ひとつせず小さな会釈さされました。この時、私は音楽の本当の喜びを知ったような気がしました。——(ヴァイオリン奏者、22歳)



●石丸先生に学んだこと。「悲愴」交響曲は、一楽章の冒頭からヴァイオラが活躍して、



やりがいがあった代わりに全楽章ほとんど手を抜かず、緊張の連続でした。曲が終わり、たくさんの拍手と、ふだん厳しい石丸先生の顔からこぼれる微笑に、音楽をやってきてよかったと実感しました。その石丸先生から、練習中に印象深いことを教わりました。それは曲の「間」のこと。曲には必ず休み(間)というものがあるが、それは単に休止符分だけ弾くのをやめているのではなく、その間も常に音楽をしていなければならない……。そういえば、合奏していてふと白けたムードになる時があるが、それは楽器を弾きながらも「音楽すること」を忘れてしまったせいではないかと思ひあたることがありました。このコンサートで学んだことを、今後の演奏にひとつひとつ活かしていきたいと思っています。——(ヴァイオラ奏者、37歳)

●これがアマチュア? 石丸さんの解説を頭に置きながら演奏を聴くと、曲も大変わかりやすく感じ、楽しめました。ヴァイオリン等の弦楽器の音量もさることながら、美しい音色に感嘆。フィナーレのタクトがおろされた瞬間、ため息がもれ、しばらくはぼう然と余韻にひたっていました。本当に、アマチュアでもこんなに素晴らしい演奏ができるのかと、感心しました。——(会社員、40歳)

●生オーケストラの迫力を堪能。いつもはレコードで聴いているチャイコフスキーも、やはり生のオーケストラの迫力にはかないません。存分に楽しめました。お話しによれば、今日が百数十回目の演奏で、やっと身についた音楽が弾けるようになったとか。人に感動を与えるためには、人知れぬ努力の積み重ねが必要だということも、音楽を通じて、一緒に行った子供にも教えることができました。——(主婦、35歳)



熱

い

余

韻。

音楽の楽しみ方 ————— 横溝亮一

音楽をどう楽しむか、それは人それぞれであろう。ある人はコンサートでベートーヴェンやモーツァルトを聴いて感動し、ある人はカラオケで演歌を歌って満足する。また若い人たちの中にはテープやFMでロックやニュー・ミュージックを楽しむ人も多に違いない。そうした楽しみ方について、まわりからあれこれ言う必要もないのだが、ただ、クラシック音楽については、「自分は音痴だからクラシックは苦手で…」と、最初から逃げ腰になる人がいるのは残念だと思う。それは、必ずしも本人のせいばかりではなく、日本ではクラシックを芸術視するあまり、あだやおろそかな態度で聴いてはならない、というような雰囲気があるので、つい敬遠する気になってしまう面もあるのだ。また、いきなり、バルトークとかストラヴィンスキーでは、誰だって、クラシックはむずかしい、ということになってしまう。しかし、例えば、ヨハン・シュトラウスの「美しき青きドナウ」とかモーツァルトの「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」などを聴いて、「これはわけがわからな

い」と思う人は少ないだろう。要するに、クラシックも曲の選び方次第で、どんな素人でも、クラシックの魅力を十分に味わうことが出来るはずなのである。私の友人で、およそクラシック音楽など縁がない生活をしている人がいた。それがあつた時、子供にせがまれたからと、ベートーヴェンの「第9」コンサートのチケットを買って欲しいと頼んで来た。もう年末近い時節でなかなか入手しにくかったのを、なんとか確保してさしあげた。ところが、そのコンサートが終わって数日後、その友人から電話があり、ひどく興奮した声で「いや、良かった、すばしかつた。こんなにクラシックが感動的とは思わなかったよ。ありがとう」と、たいへんな感激ぶりなのである。この人はその後、すっかり、クラシック・ファンになり、レコードを買って集めたり、一人でコンサートに出かけたりして、いっばしの音楽通になってしまった。これは、やっぱり、ベートーヴェンの「第9」の持つ力によるところが大きかったような気がする。もし、この人が最初に難しい現代音楽などを聞かされて

いたら、こうも簡単にクラシック・ファンになったかどうかわからないと思う。コンサートを聴きに行くより、家でレコードやFMを聴くほうが簡便であるのは違いない。けれども、多少面倒でも、ホールに出かけて、本当のオーケストラやピアニストを目の前にして音楽を聴くのは、レコードなどとは全く違う「本物」の雰囲気があつて、感動がより深くなる。地方に住んでいると、なかなかそうした機会がないのが残念だが、「ゴールドブレンド・コンサート」などはナマの音楽に触れる良いチャンスということが出来る。ステージにずらりとならんだオーケストラをながめる時、これから、どんな音、響きが湧き上がるのだろうか、胸がドキドキするものだ。こうした興奮を一度経験すると、また音楽が聴きたくなる。レコードもFMもいけれども、音楽はなんといつてもナマに限る、というのが私の持論である。心豊かにオーケストラを聴く。人生でこれほどリッチな楽しみはほかにあるだろうか。さあ、みんなで出かけよう。コンサートへ。

